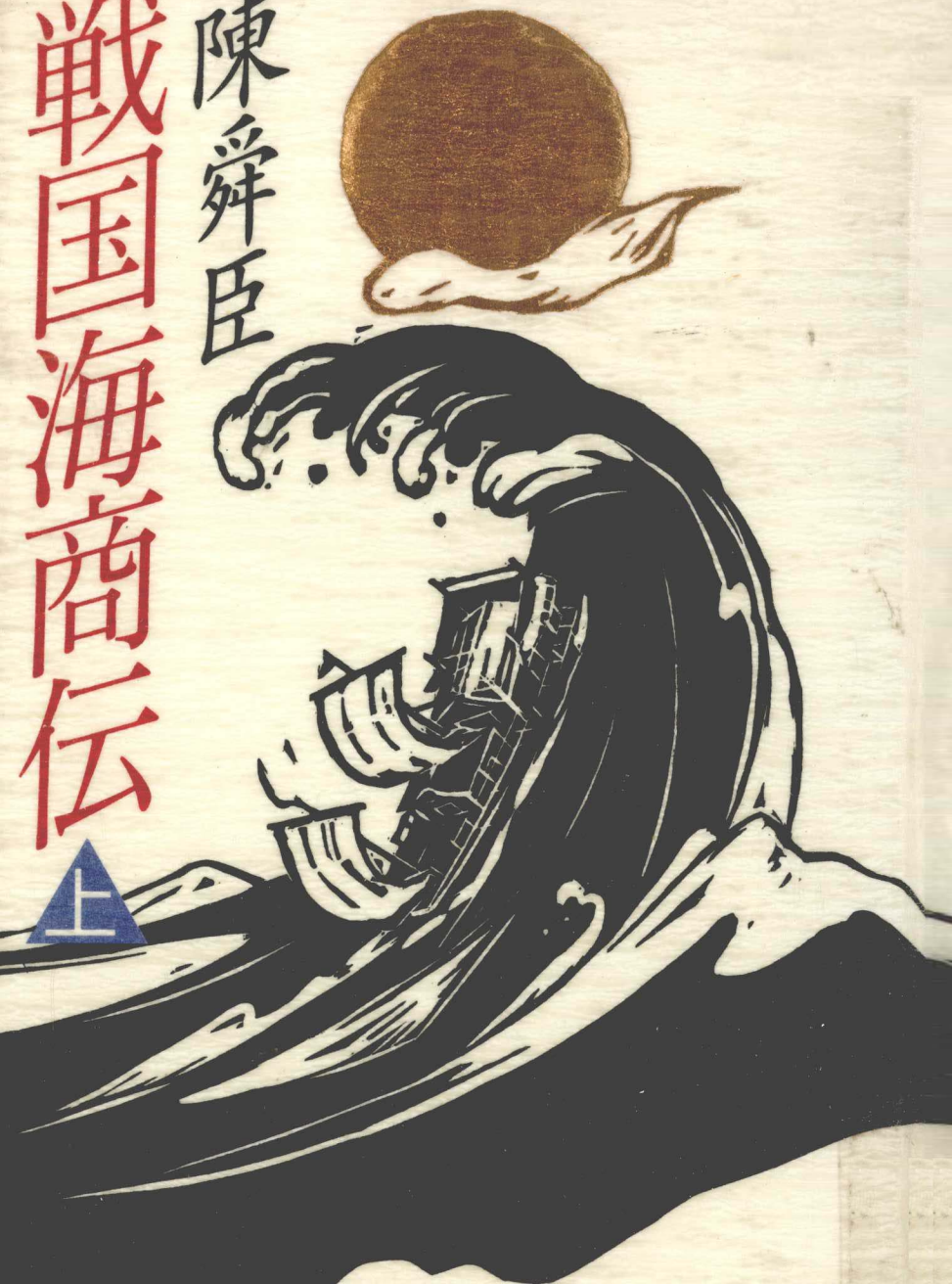


陳舜臣

戦国海商伝

上

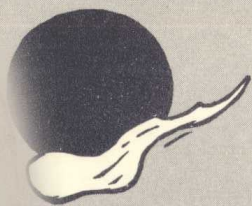


工业学院图书馆  
藏书章

戰国海商伝



陳舜臣



©Shunshin Chin

1990

Printed in Japan



陳舜臣

## 戦国海商伝

1990年2月8日 第1刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社 〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社 製本所 黒柳製本株式会社



定価 1,550円(本体1,505円)

ISBN4-06-204737-3<文2>



落丁本乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは

文芸局文芸図書第2出版部あてにお願いいたします。

戰國海商伝

上巻○目次

|           |     |
|-----------|-----|
| 故園        | 177 |
| 江戸の子      | 159 |
| 達明使       | 136 |
| 海への道      | 114 |
| 五峰船主      | 92  |
| 仏郎機(フランキ) | 66  |
| 東西南北の水    | 44  |
| 寧波の乱      | 7   |

|      |     |
|------|-----|
| 掃滅   | 328 |
| 衣冠の盜 | 308 |
| 種子島  | 278 |
| 甘棠庵  | 260 |
| 風を折る | 247 |
| 九日山  | 220 |
| 乱礁洋  | 201 |

装丁・武山忠／表紙絵・田中久司

戰国海商伝△

陳舜臣





寧波<sup>ニンポウ</sup>の乱

佐太郎の七歳の記憶は鮮烈である。

彼はそのときのことを、のちのちまでこまかくおぼえていた。それ以後の記憶よりも、はるかにあざやかであったのだ。

火の海。――

じつは船が燃えていたのである。佐太郎たちが日本の堺<sup>さかい</sup>から、ながいあいだ乗ってきた船にほかならない。夜だったはずだが、焰のあかりで、あたりは煌々<sup>こうこう</sup>として、そのためか、記憶からは夜の要素が脱落している。

燃えた帆柱が、線をひいてたおれ、水中に吸いこまれ、じゅっ、という音が佐太郎の耳に焼きついた。

「そんな音などきこえたはずはない。あのとき、船着場からだいぶはなれた所にいたのです。佐太郎さんはまだ子供だったから、きいたと思いこんだだけでしよう」

おなじ場所にいた新吉は、後年、佐太郎の思い出話をきくたびに、首を横に振って、そう言った。

そう言われても、佐太郎にはどうしてもその音を子供の幻聴とは思えなかった。あまりにもまなましい音だったのである。

「たしかにきこえましたよ」

少年のころはそう言い張ったが、大きくなってからは、先輩の新吉にきからっても仕方がないと、あきらめるようになった。先輩というだけではなく、あのとき、新吉は佐太郎を救出に來たのである。命の恩人でもあったのだ。

「音といえば、爆竹の音です。奇襲だから、大内側は爆竹を投げこんだ」

と、新吉は言う。

「そんな音はおぼえていません」

「おかしいな。けたたましい音でしたよ。あの音をおぼえていないとは。……そうか、佐太郎さんは子供だから、もう気が転倒していたのでしょう。私はあのとき、もう二十三だったから、まぢがいありません」

「私は七つでしたから。……」

押し問答はそれでおしまいになる。

大きな事件のおこった年は、人生の節目として、誰もが自分の年齢を、しっかりおぼえているものなのだ。

——寧波の倭乱。

と、明史にしろされている事件がおこったのは、西暦一五二三年のことである。明の嘉靖二年。日本の元号でいえば、後柏原天皇の大永三年にあたる。

細川氏の仕立てた遣明船は、相国寺の僧鸞岡瑞佐を正使として、その年の四月に堺を出発し、月

末に寧波府に到着した。

細川氏の遣明船は、もともと兵庫から出るのだが、このときは堺から紀伊水道を通り、四国、九州の南をまわって、中国にむかった。競争相手である大内氏の縄張りなので、瀬戸内海を避けた航路をえらんだのである。

七歳の佐太郎はこの船に乗っていた。山羊ひげをはやした、宋素卿という明国人と同室であった。堺で乗船するとき、宋素卿は佐太郎の小さな手を強く握りしめた。佐太郎はそのときの痛さをおぼえている。

日本の遣明船のために開かれた明国の港は寧波であった。

現在の浙江省寧波市にあたるが、むかしは明州と呼ばれていた。かつての遣唐使船も、この明州と大宰府のあいだを往来したのである。明代になってから、地名が国名と重複するのをきらって、「寧波」と改められた。府の役所が置かれ、外国の使節を接待するための「嘉賓館」も設けられている。

当時の明国の対外貿易は、「朝貢」を前提としていたのである。明を宗主国と認めた国だけに貿易が許された。日本も足利義満が、臣と称する国書を送って、その資格を得ていたのだ。

遣明船は三種の貿易をおこなう。

第一に進貢である。皇帝への献上品という形で、刀剣、金屏風、鎧、硫黄、瑪瑙、扇子などをはこび、「頒賜」という形で高級織物その他の貴重品をもらう。宗主国だから、けちなことはできない。つねに献上品に数倍する下賜品があった。

第二は公貿易であり、明国政府との取引である。

第三は私貿易で、寧波の牙行という特許商人、あるいは北京の会同館という交易会での商人との

取引である。沿道での私的な取引も可能であった。

明にとって、この貿易はかなり負担になったようで、その回数や船の数をできるだけ制限しようとしたのである。時代によって異なるが、「十年三艘」とされた時期もあった。

日本からの渡航には「勘合」という明国発行の渡航証明書を持しなければならぬ。いわば割り符である。明では元号が変わると、百通の勘合を日本に発給した。明は一帝一元号制だから、皇帝交替のたびに、発給したことになる。

細川船が到着する数日前、大内船はすでに寧波に着いていたのである。

佐太郎のかすかな記憶に、到着したとき、船室に人の出入りがにわかに多くなり、彼らがふだんより声を荒げていた場面が残っている。七歳の子供には、彼らのやりとりは理解できなかったが、あとから想像すると、

——大内におくれをとったではないか！

といった憤激の発言であつたらしい。

同室の宋素卿が、しごくおち着いていたことも、印象に残っている。まわりが騒然としていたのに、彼だけがそんな雰囲気の外にいるかんじであつた。

正使驚岡瑞佐の名を、佐太郎はそのとき知らなかったが、人びとが「僧正さま」とか「相国寺さま」と呼んでいた、いちばん偉いその人までが、宋素卿だけを頼りにしていたらしいことはわかつた。

——ちゃんと手は打ってあります。ご安心ください。

宋素卿はそう言ったにちがいない。

——この前のことをご存知でしょう？

あるいは、そうつけ加えたかもしれない。

当時の遣明船は、明側がら一回に三艘と制限されていた。この前の遣明船は、大内二艘、細川一艘という割当てであった。細川が不満であったのはいうまでもない。そのとき、宋素卿が一計を案じたのである。

宋素卿は日本に長く在留しているが、もとは浙江出身で、明国の事情、とりわけ交易の事情は数回の往来によって熟知していた。

——孔子廟造営のため。

という大義名分をかかげたのである。

室町幕府の対中国貿易は、天竜寺船からはじまった。足利尊氏は、後醍醐天皇の菩提をとむらうために、天竜寺の建立を思い立ち、その資金にあてるために貿易船を仕立てたのである。それ以来、交易の利益の一部を、社寺造営に寄進するのが伝統となっていた。この前の遣明船も、相国寺造営のためということになっていたのである。

明側はそれを一種の名目ていどにうけとっていたようだが、これまでは社寺造営の名目ばかりであった。かつて伊勢法樂社が一艘割当てられたことがあったが、「孔子廟」はたしかに良い思いつきだった。

孔子は中国では「至聖」とあがめられている。曲阜の孔子廟のほか、各府県にも孔子を祀る廟があった。ふつう「文廟」と呼ばれ、たいいてい学校も付設されている。

——日本でははじめての孔子廟。

といえ、特例として認められるにちがいない。——宋素卿の思いつきは、みごとにあたった。大内の二艘にたいして、細川は割当てられた一艘のほか、もう一艘のいわば「孔子廟船」が、現地

で許可されたのである。結局、大内と細川とが、それぞれ二艘ということになった。

孔子の靈驗があらたかであつたばかりではない。宋素卿は寧波の關係役人に、はげしい賄賂攻勢をおこなつたのである。

このたびは、大内三艘にたいして、細川はゼロであつた。勘合の争奪に失敗したのである。大内は勘合をもっているが、細川は正式のそれをもっていない。

勘合は元号が改まると、百通発給されるしきりであつた。十年一貢が原則だから、一代に百通も使うことはない。ただ皇帝の長寿を願つての過剰発給だが、改元されて新しい勘合が出ると、それまでのものは無効となる。

明では二年前に正徳帝が死に、去年、嘉靖と改元された。だが、新しい勘合はまだ日本に届いていない。したがって、大内船が持参しているのは「正徳勘合」であつた。新勘合発給前だから、これは有効とされる。

細川は有効な勘合がとれなかつたが、幕府に迫つて、すでに無効となっている「弘治勘合」を手に入れたのである。

正徳という元号は十六年つづき、その前の十八年が弘治であつた。弘治勘合はずいぶん長いあいだ無効であつたのだ。

——いまは嘉靖の世。正徳も弘治も、嘉靖でないことにかけてはおなじではないか。

宋素卿はそんな屁理屈を考えていたらしい。

しかし、宋素卿が頼りとしたのは、理屈よりも、前回の渡航で賄賂によつて築いた人脈であつた。

佐太郎は船室で、相国寺の僧正が宋素卿に袋を渡すのを見ている。ずつしりと重そうであつた。

おそらく黄金がはいっていたのであろう。賄賂用であつたのはまちがいない。

寧波における貿易監督官は、市船司しせんしといって、前回とおなじ頼恩らいおんという宦官くわんかんであつた。話が早かつたはずである。

数日遅れた細川船が、さきに荷揚げをはじめた。岸壁の「東庫」に、つぎつぎとはこびこまれる。先着の大内船には、まだ荷揚げの許可がおりていない。

——これはどうしたことから？

と、大内側が騒ぎ立てたのはいうまでもない。大内船の正使宗設謙道そうせつけんどうは、僧侶ながらも、気の荒い人物であつた。副使は月渚永乗げつしよえいじやうで、ほかに大内家で武勇の誉の高い神代源太郎という武士が、数十人の戦闘員を率ひきいていた。使節団は寧波と北京の間を往復するので、つねに警固の人員を伴っていたのである。これは細川側もおなじであつた。

このときの賄賂攻勢は、前回の数倍に及んだという。前回は正規の一艘のほか、孔子廟造営のための一艘が加わっているだけだった。いうなれば、「お目こぼし」にすぎない。ところが、こんどは三艘は、有効な勘合なしの割りこみである。しかも、有効な勘合を所持している大内船が、先着していた。宋素卿は寧波市舶司の頼恩に、

——正徳勘合は賊に奪われたので、やむをえず弘治勘合を持参してきた。  
と、説明したのである。

この説明を信じるなら、正徳勘合を所持している大内船は、賊ということになる。

頼恩がそれをほんとうに信じたとはおもえない。だが、彼は細川船の宋素卿から、多額の金品をもらっていた。

日本の正使が、大内船の宗設謙道であるか、細川船の鸞岡瑞佐であるか、頼恩としては、いまの



ところ確定できない、という姿勢をとることができた。

細川船は勘合なしだが、大内船もそれを奪ったという疑いがある。――  
どちらも欠陥使節である。

現場の責任者として、頼恩はどちらかに手心を加えることができる。

――どちらが正使であるかは、北京で決着をつけられよう。

中立の立場を装いながら、頼恩は荷揚げや北京への出発について、細川側を優先させたのである。荷物を保管する東庫や、北京へ行く人員を宿泊させる嘉賓館は、双方とも収容するのは無理だから、クジによってきめたということにした。

公開のクジ引きではない。市舶司で勝手にきめたのである。贈賄のコツを心得ていた宋素卿は、頼恩だけではなく、市舶司の下僚や、警備の軍官にまで金品を配っていたらしい。

二十三歳の入江新吉は、そのとき大内側にいた。大内船は豊前の池永から出発したが、新吉はそれに乗ってきたのではない。彼は七年前に渡明している。このたびは、大内船を迎えるために、蘇州から寧波にやってきたのである。

大内側の憤激がその極に達したのは、嘉賓館で招宴がおこなわれたときだった。

二人の正使のうち、どちらがほんものであるか、明国側はまだわからない、という立場をとっていた。だから、使節招待の公式行事である宴会にも、双方を招いたのである。

ところが、宴会の席次は、細川の鸞岡瑞佐のほうが、大内の宗設謙道より上位に置かれていた。「このような宴に身を置くことは、わが身の恥である！」

宗設謙道は席を蹴って退出した。

「裁決に不利になり申す。ここは……」